The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語とインドネシア語のあいづちの使用に関する対照研究 ： 頻度とタイミングをめぐって
Author(s)	オキ, ディタ アプリヤント
Citation	日本語・日本文化研究. 2015, 25, p. 133-143
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54503
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語とインドネシア語のあいづちの使用に関する対照研究
―頻度とタイミングをめぐって―

オキ　ディタ　アプリヤント

１．　はじめに

あいづちは話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い反応であり（堀口1997）、話の進行を促したり、話し手の話を聞いていることを伝えたりするなどの機能を持っている。そのため、日本語会話においては重要な役割を果たしている。しかし、他の言語では「あいづち」というようなものがあるとは限らない。言語によって聞き手の反応の仕方が異なることは事実である。水谷（1993）は、会話のタイプを「対話」と「共話」の２つに分類し、「対話」を相手との共通の理解を前提とせず、相手の賛同や同感を特に期待せず話すことと定義している。一方、「共話」を共通の理解を前提とし、いちいち相手の聞いている信号を待ち、話を促す信号をもとめながら話すことと定義し、日本語は「共話」タイプの言語だと主張している。

筆者が以前行った研究（Apriyanto：2011）では、インドネシア語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者の接触場面における日本語会話でのあいづちを分析した。その結果、インドネシア語を母語とする日本語学習者があいづちをあまり打たないことで会話が進まないという問題や、インドネシア語を母語とする日本語学習者のあいづちが少ないため、日本語母語話者に話の内容を聞いていない、あるいは分かっていないという誤解をされているということが分かった。これらの会話トラブルは、水谷（1993）が述べた会話タイプの違いが要因ではないかと考えられる。つまり、日本語のような「共話」形式の会話に慣れていないインドネシア語を母語とする日本語学習者は、日本語で会話する時にうまく「共話」形式に切り替えられない。さらに、日本語教育においては、学習者にあいづちを指導する機会が十分であるとは言えず、学習者は日本語で話すときになかなか上手にあいづちを打てないということにつながっている。

インドネシア語が「対話」と「共話」のいずれのタイプであるのかについては、未だに研究がなされていないため、本稿では、日本語とインドネシア語におけるあいづちの実態を調査し、日本語母語話者とインドネシア語母語話者がどのようにあいづちを打っているか、また両言語でどのような点が異なるのかを明らかにすることを目的とする。

２．　あいづちとは

２．１　あいづちの定義

あいづちの定義は、研究者によってさまざまである。ただし、メイナード（1993）や堀口（1997）などで述べられているように、「あいづち」は、「話し手が発話権を行使してい

る間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える短い表現である」という点で多くの研究[i]が一致している。本稿はこの定義にしたがって会話データに現れたあいづちを分析していく。

２．２　両言語のあいづちの特徴

両言語でのあいづちの使用を対照するには、まず頻度とタイミングから分析する必要がある。なぜなら、どの言語においてあいづちの頻度が高いか、あるいは低いかが明らかとなり、日常会話におけるあいづちの重要性が言語ごとに示せるからである。さらに、あいづちのタイミングを分析することで、各言語でのあいづちのタイミングの特徴が明らかとなり、外国語としての会話教育を行う上で重要なポイントのひとつとなるであろう。本稿では、頻度、タイミングという観点からあいづちの分析を行う。以下、日本語とインドネシア語のあいづちの先行研究において指摘されているあいづちの頻度とタイミングの特徴を紹介しておく。

２．２．１　あいづちのタイミング

あいづちのタイミングに関して、水谷（1988）は日本語のあいづちは話の途中に聞き手が入れる形で現れると述べている。しかし、水谷（2001）も、あいづちのタイミングに関して「聞き手があいづちを入れるのは話し手の方に休止つまりポーズがあった時である」と述べている。杉藤（1993）もあいづちのタイミングに関して研究を行い、あいづちは文法的区切りとしての句読点に出現する場合と発話者の声と重なって割り込む場合に多く見られると述べている。日本語において、あいづちは話し手が話している途中、または話し手がポーズを行っている時に現れると言えるだろう。

一方、正保（1988）はインドネシア語のあいづちは話し手が発話を済ませた後に現れると主張している。しかし、正保（1988）の研究で使われている会話データは実際の会話ではなく、小説の会話であるため、インドネシア語のあいづちは疑問文に対する応答の表現にしか見られず、常に話し手が発話を済ませた後に現れている。

２．２．２　あいづちの頻度

あいづちの頻度を分析する方法として、従来の研究では２つの方法が示されている。一つは時間を単位とする方法、もう一つは話し手が発話した言葉の音節の数を単位とする方法である。メイナー（1987）では、「共話」である日本語と「対話」である英語のあいづちの頻度を、時間を単位に比較した結果、それぞれ 60 分の会話で英語のあいづちの総数が 428 回、日本語 871 回と、日本語のほうが倍近くあいづちを打っているという結果が述べられている。つまり、英語の会話では 1 分に 7.1 回のあいづちが現れ、日本語では 14.5 回のあいづちが発話されている。崔（2001）は、日韓のあいづちを比較し、日本語のあいづ

ちとあいづちのあいだの長さは、20.7 音節であるという結果を出している。この結果は水谷（1983）の日本語のあいづちとあいづちの間に平均 20 音節の言葉が発話されるという結果と近似している。

しかし、インドネシア語のあいづちの頻度に関しては、前節で述べた通り、正保（1988）の研究は実際のデータを使っていないため、頻度に関しての主張はなされていない。

３．　研究方法

本稿では、あいづちの頻度、タイミングという観点からデータを分析し、日本語とインドネシア語を対照する。

３．１　データの収集方法

本稿では、「物事や事実を説明する会話」をデータとして、分析を行う。「物事や事実を説明する会話」は、話し手が新しい情報を提供するため、情報交換が行われ、聞き手にとってあいづちが打ちやすくなる会話であり、また受け取った新しい情報に対する意見や感情を表出するあいづちも出やすいと考えられるため、あいづちを研究するのに適していると言える。そこで、調査協力者には「自分が知っている旅行先・故郷・母国のこと」について話してもらうことにし、以下の２つのデータを収集した。

データⅠ：インドネシア語母語話者同士による「自分の故郷」についての
　　インドネシア語での会話

データⅡ：日本語母語話者同士による「留学・旅行に行った国」についての
　　日本語での会話

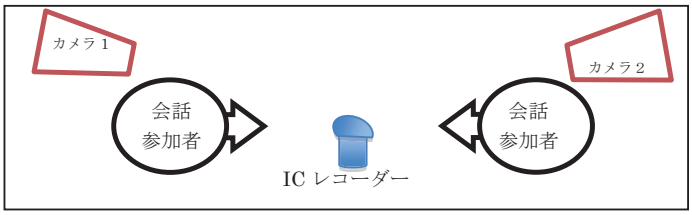
表 1　データⅠとⅡの会話参加者の情報

データⅠ インドネシア語会話	参加者	性別	年齢	データⅡ 日本語会話	参加者	性別	年齢
会話 IN 1	I1	女性	20 代	会話 JP1	N1	女性	20 代
	I2	女性	20 代		N2	女性	20 代
会話 IN2	I3	女性	20 代	会話 JP2	N3	女性	20 代
	I4	女性	20 代		N4	女性	20 代
会話 IN3	I5	男性	20 代	会話 JP3	N5	男性	20 代
	I6	男性	20 代		N6	男性	20 代
会話 IN4	I7	男性	20 代	会話 JP4	N7	男性	20 代
	I8	男性	20 代		N8	男性	20 代

本研究で扱うデータは、２名の会話参加者のペアによる会話であり、各言語それぞれ４組のデータ、計 8 組の会話データを収集した。各言語の 4 組のうち、女性同士のデータが２組、男性同士のデータが２組である。日本語が会話データに影響しないように、インドネシア語母語話者同士の会話協力者は日本語学習者ではないインドネシア語母語話者とする。日本語母語話者同士による会話は関西地区の大学の外国語学部の学生に協力してもらい、出身地は設定しないが、違う専攻語の学生と組んでもらう。

全ての会話収集に際しては 1 組につき 20 分の会話を録音し、録画も行った。録音・録画されている状態での会話は参加者に緊張を与えると考えられるため、分析のデータとして扱うのは開始後 5 分間を除いた 15 分間の会話を文字化したものにした。

図 1　データ収集の様子



３．２　　本稿の分析対象と研究方法

本稿では両言語の頻度とタイミングの傾向を詳しく見るため、研究データ I とデータ II から会話を一つずつ取りあげる。

表 2　分析するデータの会話参加者の情報

データ I 会話 IN1	年齢	出身地	データ II 会話 JP1	年齢	旅行先	出身地
I1	20 代	セラン 西部ジャワ州	N1	20 代	トルコ	奈良
I2	20 代	ゲモロン 中部ジャワ州	N2	20 代	タイ	滋賀

本稿では、これらのデータに現れた聞き手によるあいづちをリストアップする。あいづちの頻度を３．２．１で説明する方法で計算し、両言語でのあいづちの使用頻度の違いを見ていく。そして、両言語のあいづちのタイミングについては、話し手が発話権を行っている際に、どのタイミングであいづちが現れるのかという観点で分析していく。

３．２．１　あいづちの頻度を算出する方法

本稿でのあいづちの頻度の算出方法を説明する。まず、以下の（1）のデータでは、3 つのあいづちが見られた。145 行目で現れたあいづちは聞き手が話し手の発話に短い反応を行ったため、あいづちとして見なすが、144 行目で現れた「うん」は話し手の質問に対しての応答であるため、あいづちとして数えない。本研究は、このような方法であいづちを取り出し、数える。

（1）（会話データ JP1）　〔トルコの祭りについて話している〕
142 N1 :=有名なのが,断食祭りとその後,砂糖,砂糖祭り.
143 N2 :￥砂糖？￥
144 N1 :うん,なんか,断食開けに,[甘いもの,あめあめか,あめ,[あめちゃん↑
145 N2 :　　[へえ::.　　[へえ::.

水谷（1983）は、異なる言語を比較するために、「音節を単位とした頻度」で調査を行っている。インドネシア語は音節言語であり、基本的にローマ字 2 文字の CV が 1 音節であ

る。例えば「buku」には４文字あり、発音は[buku]となるため２音節と数える。ただし、V、VC、 CVC、 CCV、も１音節として数える。例えば「Indah」「Enak」「Gratis」は[indah][enak][gratis]と発音し、それぞれ２音節と数える。日本語はモーラ言語だが、本稿では音素的音節で数える。撥音・促音・長音を隣接する音と結語するひとつの音節と見なし、例えば「卓球」「銀行」をそれぞれ２音節と数える。

本研究はこの方法を使用し、収集したデータに現れたあいづちの数と音節の数の割合を算出した。すなわち、話し手が発話した全音節の数を聞き手が打ったあいづちの数で割り、１回のあいづちに対してどれだけの音節の数の言葉が発話されているかを計算した。

３．２．２　あいづちのタイミングの分類

あいづちのタイミングに関しては、崔（2011）を参考にし、本研究は「発話後に打たれるあいづち」と「発話途中に打たれるあいづち」という分類であいづちを見ていく。

（2）（会話データ JP1）　〔日本にいるタイ人について話している〕
229 N1 :観光で来てるといっぱい見るけど.hhh=
230 N2 :=ああ::留学生はまあいる[っとは思うけど.
231 N1 :　　[うんうんうん.
232 N1 :°そっか°,留学生ここは特に,[多い.
233 N2 :　　[うん°いるいる°.=

（2）のデータの中では、230 と 232 のあいづちは発話後に打たれるあいづちとして見なした。このような、話し手の話が終わった時に打たれたあいづち、または話し手がまだ発話権を持っていて、話し手のポーズに聞き手があいづちを打った場合は、発話後に打たれるあいづちとして数える。231 と 233 のあいづちは話し手の発話と重なっているため、発話途中に打たれるあいづちとして見なした。両タイプのあいづちのタイミングのそれぞれの数と会話に現れたあいづち数の割合を算出し、両言語のあいづちの現れ方の特徴を見ていく。

４．　あいづちの頻度に関する分析

本稿のデータでは、インドネシア語会話（IN1）では、あいづちの頻度の平均は 31.5 音節に 1 回であるのに対して、日本語会話（JP1）では、17.9 音節に 1 回のあいづちが打たれていた。崔（2011）では、日本語では 20.69 音節に 1 回のあいづちが現れたという結果であったが、先行研究と本調査の結果から見ると、日本語に比べて、インドネシア語会話でのあいづちは少なくなっている。

表 4　会話データに見られるあいづち頻度

IN1	音節数	あいづちの数	1 回のあいづちに対する音節数	JP1	音節数	あいづちの数	1 回のあいづちに対する音節数
I1	1980	105	33.9	N1	2863	105	17.3
I2	3562	71	27.9	N2	1817	156	18.4
計	5542	176	31.5	計	4680	261	17.9

表 4 に見られる通り、日本語のあいづちとあいづちの間に発話されている言葉は 17.9 音節であるのに対し、インドネシア語に見られる言葉は 31.5 音節である。その理由はいくつか考えられるが、その 1 つとして、日本語では 1 つの発話が短いが、インドネシア語では長いことがあげられる。発話が短いというのは、話し手の発話は短くて情報が途中までしかない発話であるが、一つの発話として成立しているということである。

まず、日本語の例を見る。

（3）（会話データ JP 1）〔初めてのタイの思い出について話している〕
39　N1 :私::初めて行ったのは 1 年生のときで,その前の年にあの,すごい大きな,=
40　N2 :=あっ[うん.
41　N1 :　　[洪水が,[あって,
42　N2 :　　[洪水あったあった.
43　N1 :なんか,ランシット大学↑
44　N2 :あっ,うん[うん.
45　N1 :　　[に行ったときに,その洪水の,水で木が全部枯れたから,=
46　N2 :=ああ::.
47　N1 :なんか,アバターって映画やっていた,=
48　N2 :=うんうん.
49　N1 :あれ::の後だったから,その枯れた木に,ペンキいっぱい塗って,hhh
50　N2 :あ[あ¥そうなん¥　へえ::.
51　N1 :　[そこから¥(...)¥てて,
52　N1 :すごい,あのう,タイ人,すごいな(h)と(h)思(h)いました.
53　N2 :そうなん,[え,ランシット大学って:.

（3）では、N1 が 39 から 52 まで発話権を持ち、一つのナラティブを 8 回に区切って発話を行っており、その区切りごとに聞き手の N2 があいづちを打っている。しかし、その区切りの部分ごとの情報は未完結であり、聞き手は部分的な情報しか受け取っていないが、それにも関わらず、間が置かれたところで聞き手があいづちを打っている。

つまり、発話のまとまりが小さいため、完結した情報にはもちろん、短くて情報が途中までしかない発話でもあいづちを打つことで、あいづちの頻度が高くなっている。

これに対して、インドネシア語では、以下の例のように、発話のまとまりが大きいということがデータから見られる。

（4）　（会話データ IN 1）〔インドネシアの祭りについて話している〕
145　I2 :selain: acara tujuh belasan itu biasanya kita adain ini sih kayak,
146　I2 :kan dikampung itu kan biasanya kalo misalnya ada hajatan ato apa gitu kan [kita::,
147　I1 :　　[hum hum hum.
148　I2 :ini ya gotong [royong karena gak ada catering,=
149　I1 :　　[bantuin gitu ya.
150　I2 :=[gak ada:: apa namanya event organizer ato [apa gitu kan,=
151　I1 : [hu:m.　　[aa::.
152　I2 :=jadi kayak, tiap kali ada yang, ada yang punya: hajatan tuh,=
153　I2 :=kita biasanya cuma ngasih tau ke yang::,
154　I2 : apa namanya istilahnya orang yang:: .hh aa eo e, event organizer [tapi yang gak
155　　resmi gitu,
156　I1 :　　[hum.
157　I2 :tapi...

（4’）（IN 1 の日本語訳）
145　I2:独立記念日のイベント以外は普段,
146　I2:村とかには誰かが結婚式をあげるとかしたら[我々::,
147　I1:　[うんうんうん.
148　I2:一緒にやって助け[合ったりする,ケータリングがないから,
149　I1:　[手伝いにいくね.
150　I2:[ウェディングオーガナイザー[とかないだろう,
151　I1:[う:ん.　[ああ::.
152　I2:なので,そういうようなイベントがあったらさ.=
153　I2:=我々はただ知らせる::.
154　I2:なんだっけ，ウェディングオーガナイザーみたいなものなんだけど,[形式的
155　　じゃない?
156　I1:　[うん.
157　I2:でも...

(4) のインドネシア語の会話では、日本語の会話と比べると、発話のまとまりが大きい。インドネシア語ではひとまとまりの情報を何回かに区切ることは日本語と同じだが、その区切った部分でできる間にはあいづちを打たれる傾向が低い。会話例を見て分かるように、151 の「hu:m」以外、インドネシア語でのデータの聞き手は節の区切りに完結した情報を得てからあいづちを打っている。情報が途中までしかない発話に間が置かれても、あいづちを打たないため、全体的にあいづちの頻度が日本語よりも低くなっている。

５．　あいづちのタイミングに関する分析

次に、あいづちのタイミングに関して見てみたい。

表 5　会話データに見られるあいづちのタイミング

IN1	あいづちの数	発話後あいづち	発話途中あいづち	JP1	あいづちの数	発話後あいづち	発話途中あいづち
I1	105	56（53.3%）	49（46.7%）	N1	105	60（57.1%）	45（42.9%）
I2	71	33（46.5%）	38（53.5%）	N2	156	93（59.6%）	63（40.4%）
計	176	89（50.6%）	87（49.4%）	計	261	153（58.6%）	108（41.4%）

正保（1988）はインドネシア語のあいづちは話し手が発話を済ませた後に現れると述べていたが、表 5 で見られる通り、IN 1 では重なったあいづちの出現率は 49.4%を占め、５割近く現れた。一方、水谷（1988）は日本語のあいづちは話の途中に聞き手が入れる形で現れると述べていたが、表 5 で見られる通り、JP 1 では発話途中のあいづちの出現率は 41.4%で、インドネシア語の割合より低い。

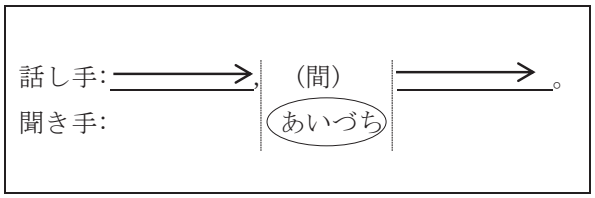
日本語には発話途中のあいづちの出現率が低く、発話後に多くのあいづちが現れるのは発話者が、聞き手があいづちを打てるような間を作るからであり、インドネシア語に重なりのあいづちがたくさん現れたのは、発話者が間を作らないからであると考えられる。この点について、データを見ながら考察する。

５．１　　日本語の発話後のあいづち

（3）　（会話データ JP１）〔初めてのタイの思い出について話している〕
39 N1 :私::初めて行った 1 年生のときで,その前の年にあの,すごい大きな,=
40 N2 :=あっ[うん.
41 N1 :　　[洪水が,[あって,
42 N2 :　　[洪水あったあった.
43 N1 :なんか,ランシット大学↑
44 N2 :あっ,うん[うん.
45 N1 :　　[に行ったときに,その洪水の,水で木が全部枯れたから,
46 N2 :=ああ::.
47 N1 :なんか,アバターって映画やっていた.=
48 N2 :=うんうん.
49 N1 :あれ::の後だったから,その枯れた木に,ペンキいっぱい塗って,hhh
50 N2 :あ[あ￥そうなん￥　へえ::

（3）に見られる通りに、N1 は文を一続きに発話するのではなく、発話の途中にポーズを置きながら発話を区切っている。その結果、42 に現れたあいづち以外は話し手の発話と重なっておらず、聞き手は話し手の作ったポーズにおいてあいづちを打つという傾向が見られた。これは話し手が聞き手にあいづちを打てる間を作っているということであると考えられる。これを図で表すと、図２のようになる。図２から分かるように日本語では、話し手は発話の途中にポーズを置き、聞き手のあいづちを期待する。さらに、話し手は聞き手のあいづちの終了を待ち、その後、次の発話へ移行しているという傾向が見られた。

図 2 日本語のポーズの置き方とあいづちのタイミング



しかし、このような状態は話し手と聞き手の認識が一致していなければ、成り立たない。聞き手の観点から見ると、話し手のイントネーションによって、TRP[ii]が来ることを聞き手が予測できるため、聞き手がそこであいづちを打ち、あいづちが終わるのを待って、話し手が発話を続けているのだと考えられる。つまり、話し手が聞き手のあいづちをターンと見なして、ターン交替を行っているとも言える。このような話し手と聞き手の認識の一致によって、あいづちと話し手の発話は重ならない。

５．２　　インドネシア語の重なったあいづち

日本語のあいづちのタイミングとは異なり、インドネシア語では、話し手は発話の途中や終わりでポーズを置くことはしていたが、聞き手のあいづちを期待せず、次の発話に移行している。そのため聞き手があいづちを打つことによって、話し手の発話と重なってしまう。

実際にインドネシア語の例を見る。下線部が繋がっているところは一つの文であることを表している。

（5）（会話データ IN１）〔現在のインドネシアの祭りの有様について話している〕
105 I1 :ya ada ada [rt, apalagi kalo yang tujuh belasan sih paling,[tapi makin kesini tu ma[ki:n=
106 I2 : [ada? ngapain aja? [oo::h. [kaya gak
107 ada=
108 I1 :=makin berkurang,[karena anak anak kecilnya itu dah makin gak ada=
109 I2 : [hu:m.
110 I2 :=individualis gi[tu ya?
111 I1 : [heeh, kalo kalo yang dulu tuh waktu masih sd, masih smp tuh masih kalo mau=
112 I1 :=tujuhbelasan sebulan sebelumnya tuh,[.hh diajakin ayo kumpul kumpul, [di rt mana gitu,
113 I2 : [hum.[a] [hum.
114 I1 :trus kita mau ngadain acara apa nih,[sampai acara panggung atau a[cara apa::.
115 I2 : [hum. [lomba lomba gitu.=

（5’）（データ４の日本語訳）
105 I1:あるある[RT,特に独立記念日が近づいたらな,[でも最近はもっと[::.
106 I2: [あるの？何している？ [お::. [活動
107 ない=
108 I1:=活動減っている,[子どもも少なくなってきているから,=
109 I2: [ふ::ん.
110 I2:=遊ばなくなった[ね,
111 I1: [そう,昔は小学校中学校のころは=
112 I1:=独立記念日の１ヶ月前,[集まったな,[どこかに,
113 I2: [うん. [うん.
114 I1:今年何をやるんだろう,[ステージとかでも作っ[て,
115 I2: [うん. [試合とかも.

（5）に現れたあいづちは全てが直前の発話と重なっている。113 に現れる「hum」[a] と 115 の「lomba lomba gitu」だけが文の途中で発話され、他のあいづちは文が終わった後で現れたのだが、話し手が聞き手にあいづちを打たせる間を作らないため、あいづちが話し手の次の発話と重なってしまっている。インドネシア語のポーズとあいづちの関係を図示すると図３になる。

図 3 インドネシア語のポーズの置き方とあいづちのタイミング

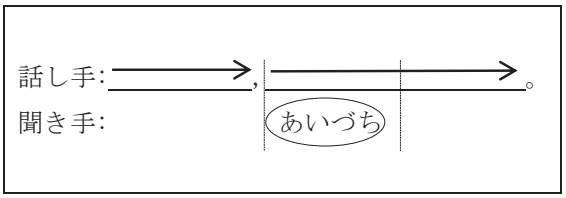


図３で分かるように、インドネシア語の会話では、話し手が相手の反応、いわゆるあいづちを期待せず、すぐに次の言いたいことに移行するために、発話が聞き手のあいづちと重なってしまうのではないかと考えられる。

６．　考察

本稿での分析の結果から、両言語でのあいづちの現れ方に差があるということが分かった。水谷（1993）は、「対話」的な会話はそれぞれの考えを述べ、問いを発し、問いに答える形であり、２人の話はそれぞれに別の流れを持つから、２本の線で表せると述べている。

A_____　　_____　　_____

B　　_____　　_____

一方、日本語の会話は「共話」的で、A の話の途中に B のあいづちが重なり、B が話し始めると A のあいづちが重なるので、１本の線のようになると述べている。

A,B

水谷（1993）の主張から考えると、本調査でのインドネシア語のあいづちの現れ方が話し手の発話と重なっていることは「共話」的だと考えられるが、水谷（1993）は「共話」的な会話は一つの文を一人一人の会話参加者が完成しなければならないということではなく、むしろ聞き手に後半の完成をゆだねることによって、ともに文を作る態度が歓迎されると述べているため、インドネシア語の会話のタイプは「共話」だとは言い難い。

また、インドネシア語の発話のまとまりが大きく、よって、あいづちは話し手が一つの情報を伝達した後に現れるということが明らかになった。さらに、インドネシア語の会話では、話し手が発話権を持っている際にあいづちを打つというような態度は見られなかった。インドネシア語を母語とする日本語学習者が日本語で会話を行う際にあまりあいづちを打たないのは、このようなインドネシア語の会話における参加の仕方が学習者のあいづちの使用に影響を与えているからだと考えられる。これは、日本語学習者へのあいづちの指導の際に注意すべき点の一つだと言うことができる。

本稿ではタイミングと頻度という観点からインドネシア語と日本語のあいづちを見てきた。しかし、これに止まらず、両言語でのあいづちの機能、形式、他の観点からの分析をする必要がある。そして、本稿で扱っている会話データは女性同士の会話であるため、男女による両言語のあいづちの使用の異同に関しては考察できなかった。堀口（1997）は、あいづちは参加者の年代、性別、人間関係、会話の話題などによって異なってくると主張しているため、より広い観点からの研究を今後の課題にしたい。

【参考文献】

正保勇（1988）「インドネシア語のあいづち」『日本語学』7 巻 13 号 p.31-37 明治書院

崔ハナ（2011）「日本人と韓国人のあいづち比較—あいづちの頻度、タイミング、機能について—」『国文目白』50 号 p.100-113 日本女子大学

杉藤美代子　（1993）「効果的な談話とあいづちの特徴およびそのタイミング」『日本語学』12 巻 4 号 p.11-20 明治書院

水谷信子（1983）「あいづち応答」水谷修編『話し言葉の表現』p.39 筑摩書房
水谷信子（1988）「あいづち論」『日本語学』 7 巻 13 号 p.4-11 明治書院
水谷信子（1993）「「共話」から「対話」へ」『日本語学』11 巻 4 号 p.4-10 明治書院
堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』p.40 くろしお出版
メイナード、泉子・K（1987）「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言語』16 巻 12 号 p. 88-92 大修館書店
メイナード、泉子・K（1993）『会話分析』（日英語対照研究シリーズ）p.58 くろしお出版
Apriyanto, Okie Dita （2011） Penggunaan dan Pengertian Aizuchi pada Pembelajar Bahasa Jepang Mahasiswa Dr. Soetomo *Skripsi*［アプリヤント、オキ・ディタ(2011)「ドクターストモ大学の日本語学習者におけるあいづちの使用と理解」ドクターストモ大学卒業論文］
Sacks, Harvey, Emanuel Schegloff and Gail Jefferson （1984） “A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation.” *Language* 50 pp. 696-735

---

[i] 水谷（1984, 1988）、小宮（1986）、岡崎（1987）、劉（1987）
[ii] TRP とは、「Transition Relevance Place (移行適切箇所)」の略で、話者交替が起こる可能性がある箇所のことを指す （Sacks et al. 1974）